

クライアントの環境における欠如性と不在性の検討

—存在論的分析をもとに—

○文京学院大学 田嶋 英行 (04929)

キーワード：環境、実存論的分析論、失うこと

1. 研究目的

ソーシャルワークは、クライアントがその環境と相互に影響し合う接点に介入していく。それはすなわち、クライアントとその環境の両者に、同時に焦点を当てていくということの意味する。ただし現在のところその「環境」は、有機体一般を対象とする生態学(ecology)の考えをもとに規定されている。しかしながらクライアントは、あくまで人間であり、他の有機体とは本質的に異なったあり方をしている。すなわち実存(Existenz)として、「自分の存在することへ向かって自分を関わらせつつ存在する」(茅野 1968 : 93)のである。また一方でクライアントは同時に、「世界=内=存在(In·der·Welt·sein)」として存在している。クライアントは「世界」のうちで配慮的に気遣うからこそ、道具や事物といった存在が現れ出てくる(現象する)のであり、また顧慮的に気遣うからこそ、他者が同様に現れ出てくる(現象する)。つまり、そもそもクライアントが自らの「環境」を構成し得るのは、彼ら自身が「世界=内=存在」として「世界」のうちに存在しているからなのである。

ただしソーシャルワークにおけるクライアントは、多くの場合、何らかのものや他者を喪失してしまっている。これまで保持していた財産などのさまざまなものや重要な他者を失ってしまっているがゆえに、日々の生活に何らかの困難を抱えている場合がほとんどである。したがってソーシャルワークにおけるクライアントの「環境」においては、ものや他者があることよりも、むしろそれがないこと自体に課題があると考えられるのである。ただし生態学を始めとするシステム思考によっては、クライアントとその環境において、ものや他者がないということ捉えることができない。そもそもシステムとは、ある目的を達成するために複数の「要素」がそれぞれ関係し、全体として1つのまとまった働きをする集合体のことであり、またここにおける「要素」とは、ものごとを成立させるために必要なものごとである。したがってシステム論においては、あるものについては把握することは可能であると考えられるものの、一方でものや他者がないことについては、原理的には表現し得ないのである。

ここではクライアントが実存として存在することをもとに、どのように彼らがものや他者を失っていることを把握しているのかについて検討をおこなっていく。

2. 研究の視点および方法

人間が実存として存在することについて存在論的に分析したMartin Heideggerによる実存論的分析論(Die existenzielle Analytik)をもとに、クライアントの「環境」における欠如性と不在性についての検討をおこなっていく。なおここでいう「存在論」とはすなわ

ち、そもそもものが存在するとは何か、という根本問題を研究するものであり、実存論的分析論とは、人間という存在者が実存として存在することが何かを追究するものである。

3. 倫理的配慮

本研究は文献を用いた「文献研究」であるものの、日本社会福祉学会研究倫理指針に則っており、したがって倫理的にはとくに問題がないと考えられる。

4. 研究結果

人間がその周囲にある「環境」を構成する要素の1つとしてのものに触れることができるのは、人間が現に存在（あること）しており、かつその人間に対してすでに「世界」が暴露され、さらにこの「世界」のほうからものが接してくる場合だけである。これは彼らが配慮的に気遣うことによって可能になるのであるが、まずものが道具として現れ出てくる。またそれが何らかの事情によって、たとえばそれが破損した場合などにおいては、そのものの事物性が露呈される。さらにそれ自体がなくなってしまったとき、その欠如性が暴露されることになる。一方でその「環境」を構成するもう一つの要素としての他者は、人間が顧慮的に気遣うことによって、その「世界」からそれ（他者）が現れ出てくることになる。ただし他者は、自身と同じように実存としてかつ「世界=内=存在」として存在しており、したがってそれら両者の「世界」はともに共有し合う「共世界」として規定される。またその他者の存在自体も、自身の存在とともに存在し合う「相互共存在」として規定されることになる。したがってかりに他者が亡くなったとしても、もともと両者はともに「世界」を共有し合う「相互共存在」として存在しているため、亡くなった他者はいない者として、すなわち不在というあり方において存在することになる。

5. 考察

そもそも現在のソーシャルワークにおいては、とりわけ現在におけるそのもっとも主要なモデルとしての「生活モデル」においては、クライアントを「現実のまたは実際の損害や喪失、もしくは将来の脅威としての損害や喪失（たとえば病気、死別、失業、困難が生じる過渡期、個人間における摩擦、数えきれないほどの他の苦痛を伴う生活上の問題や出来事）」（Gitterman & Germain 2008 : 60）を有する者として捉えていく。ただしクライアントは、あくまで実存して「自分の存在することへ向かって自分に関わらせつつ存在する」のであり、したがって彼らがそのような存在することをもとに、彼ら自身の環境における欠如性や不在性を的確に捉えていくことが必要になるのである。

（引用文献）

Gitterman, A. & Germain, C. (2008) *The Life Model of Social Work Practice, Advances in Theory & Practice*, Third edition, Columbia Univ. Press.

茅野良男 (1968) 『実存主義入門』 講談社.